



倉 録

將軍記

寛文四年

又 5
6014
1



又5
6014
1



本朝將軍記一

鎌倉第一代

右大臣源賴朝

源賴朝みなもとのよりともの清和天皇よしみずみの弟あに十代じゅうだいの後胤ごういん在馬ま以源義朝よしみちは三男みつなり母はは熱田あつた大文司おほぶんし教位のうゐ藤原季範ふじはらよしのりの娘むすめなり後白河院ごしろくわい保元三年ほげん二月三日にふがひのふか右大臣みぎのち權少進ごんせうしんに任たづせし家時いへとき三年十二歳

二條院平治元年ふたじょういんへいぢ正月しげつ廿九日にふくじゅうくにち右近將監みぎのちかえりに任たづせし家時いへとき二月十三日にふがひのみそ右大臣みぎのち權少進ごんせうしんと任たづめて上西かみさい院いん院いん人ひとは補おぎなひし家右近いへのちかえりの監かみに如ごとし

同年このとし六月むねつき廿八日にふがひのよひ院いん人ひとと家右近いへのちかえり同日このひ十二月ふたつき十日にふがひのよ右大臣みぎのち權少進ごんせうしんに任たづせし

小任ぎの家

同日廿七日又義朝右衛門藤原信朝よりして平清
 盛と合戦す所は源家景代傳より源義朝の
 遺棄より須切の志りと頼朝よりつけておれく戦場
 はありし義朝乃軍敗れし東よりありし頼朝
 ありしと赤連しよりたはりしと眠つてありし
 ねくけりしなり只一騎に列森山より源里人かて頼朝
 とありしと頼朝須切を捨て二人斬りし里人か
 されて逃らるるに又義朝後田吉衛政康とせし
 義朝とせしと頼朝とせしとていづるは後田吉の
 子逃けしよりかくて又赤とせしとて義朝とせしと
 ありしと

只一騎なりし由ひと大官瓜志のどて浅井の北郡あり
 已せしと民はありしとありしとありて家に
 めて年代越つて明年二月吉やうしとて首途と
 て毎濃園青墓よりせしとありしと不破の穴が原より家
 平家の家より平兵衛宗清より生捕して六波羅より
 せしと平家清盛よりせしとありしとありしと平清盛
 乃は母池の禰尾ありしとありしとありしと命とをありしと死刑
 とありしとありしと伊豆國より流す時より永暦元年二月十一日
 頼朝の年十九歳なり

安元二年頼朝伊豆國蛭小浜伊東入道祐親がありし
 あり祐親は平家宗清とありしと祐親が子の命祐親は

ふ告ちてせし頼朝と爲す頼朝母びて曰ふ小徳が
館は入る小藤の帝威長作く来り帝威徳相成りて
まると小徳の帝威に伊豆の玉勇士とて上野女平直方
が其代の孫より時政らが娘政子と書して頼朝と誓と
す

治承三年三月雄の文亮上人伊豆國に流されひそ
かり頼朝小藤より得す
同日平源三位入道頼政の子息仲徳と平家とよし
とくして四月九日乃頼一院第二の文茂仁親と号す
乃三乗念の四下子ありて小藤友と号すめす
りら流玉の源氏爲る令旨とすある小頼平部を感

為朝が在る一を京一を海と八條院人の任ト十帝の
改め令旨乃使とす小藤東玉觸つり伊豆
小徳の館より一を兵衛依頼朝に令旨と下す家
朝の去り永曆元年三月十日為國に流さるより
其余年とすり年二十に歳りしは平相國清威
天下に権とす通り重吾とり今これ令旨と号
りしを兵衛と号して天乃とすりしは時節也と大
よまみとすなり

同八月十七日乃頼朝すかりち小藤時政仍も未定徳
る威徳の徳兄才口人土肥土屋豊清依家と号す十餘
とつりして小藤判友平兼隆と号す依加若次景康と

本が首とと家の一族あり

頼朝が兵隊あをよみ来別家と打多しねとやまろくは源
清代乃軍とせつすう頼朝相模乃土肥のあむびさ女三
日石橋の陣どりのあふ軍勢大場う景親侯也常景前
下子余務して石橋のあて幾く頼朝つづふ七橋
ふりて松のよこは土肥の常景平にねあつた
梶原平景時大場軍中ありけふかひうふ四
と頼朝の通いで大場とつと陣と退きつり
より頼朝のつとて箱根のつと又土肥のま若宿が海より
兵よのりて安房のあむびく三浦の一族ありたつた



九月十三日安守より上徳はあつていさよ軍共は高余
務より日十七日と徳はあつていさよ千代女常鹿子息
嵐山下とせし徳は日九日上徳は女廣常二万を務と
率してあつて頼朝とびく徳は女廣常とせし徳は
と徳は女廣常よりと徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常よりと徳は女廣常とせし徳は女廣常
ら徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし
あつていさよ

十月二日頼朝の方を務よと徳は女廣常とせし徳は女廣常
同日富山次郎重忠とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常

東八列甲斐の源氏等みかあつていさよとせし徳は女廣常
及び徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常

日九日大倉平冬景義とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常

日十二日小林彌の光此山徳は女廣常とせし徳は女廣常
思乃八幡交とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
年来此山徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常
とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常とせし徳は女廣常

後冷泉院の御宇に侍り守源朝臣頼朝執定と
きりぬりて安倍貞任とありし時、時康平六年の
秋八月ひそふ石清水と勅務して由比孫今これを
とありしと、永保元年二月に頼朝の子陸奥守
義家八幡太郎と号して、代理とありしと、今又小林の御今これを

十八日大倉を命、景親平家大軍ありて、後河
多越とてくさりしと、さてその陣よりくさりと
一子余務と率いて是柵と越てを、かの景親
ありしと、河村山に迎へて言がく、景親
つきのふ、身命は口日とありしと、兼合とてしむ

十九日伊東次命、祐親は師、平家小松少将、藤盛
大らんとありしと、せめくさるる海より、せはらんや
て伊豆乃玉鯉名のとありしと、久海よりありめ
くんと、守家と天野の友、口を景とてしよ
せくしけり、美濃川の御らんと、まの海に浦
うらみ澄と祐親が率、まねど、ありありぬ
元年、祐親は師、頼朝とありしと、と祐親が
二男九命、祐泰はげと、せそと、まうりて、ね
ま、せし、その恩、源と、まんと、やうあると、と
智をあり、祐泰、寸又と、て、清、敵と、て、因
人、まうり、うの、み、と、て、い、と、て、清、を、ん、や、う、と

うくならざるをいふに及ばざらんといふ平家
よみ

同女日親朝後河國賀治よむらひく平家小妻おの
堆威薩摩守忠度之川守忠度大將軍やして
安藤別當忠盛と徳外忠清以下教司安とて富士
川のありのきし陣とて屋をんはりて武田
を而信義討つかよ平家の陣のうへをまありと記
とつくる富士沼ありありかゝる水鳥一日むらり
きりてその羽をむとく小軍勢をくし平家おの
ころ平家とてや源氏とてしよとて東國のみか
朝朝のあかまりとて前後とつくりて

きりてふるかゝるをそとぞんちりみられぬ
きたあともやと成りてあらのわらぬ



竹園記

七

頼朝軍兵とてめく上落し平交とてたんと
 擬う依千紫之浦上徳女も凍ていよく常陸國作
 作之節美政曰冠者秀義は大軍たのめをいす
 中味方よりいふと東より平交を過すの
 ありしにわくとていふことすから武田を而
 信義と強河をよ居安田とて美定は遠いと守しり
 依九節冠者美依具列より美濃川より来りて頼朝
 湯す平よりいへりて海と信守は當白
 川院乃出守永保三年九月曾祖澄具守淡路長義
 家奥列北之節武衛守而家衛とせりし是合戦
 日事依而も美家の舎弟は美東射美光けまるとて

強袋と曰程れ殿上掛とていふ都とておと興
 列よりい見の陣中よりい敵とていへり
 その佳例よりいりて頼朝おのよりい感せ依
 女之日頼朝相換國府よりいりて小糸千成三浦以下
 勲功乃賞おらる依大座之節景親海人よりいり
 上徳女廣常よりいりて依平格の合戦の外常は
 ありき依日女六日景親が敵とていへり
 十一月日頼朝常陸國府よりいりて依行が一族家入
 中よりいりていり千紫之浦上徳女等小糸とて
 計策とていりて依依行の敵は上徳女廣常とていり
 ともいりて大矢橋よりいりて依廣常よりいりて

きまじりたるものなれば帝亦たまあらうとも依り冠
者秀義の父曰帝隆義を京して平家あり此亦
思ふとめぐりし秀義の爲國全所城よりあり頼朝
すかりらと肥前平和田を威を皇宗遠征未定總威
恩德若空実平山季重以下教子孫とてしむる依
ちれども城の要害險阻して責がく秀義が叔
父作行爲人の敵んうく又武勇知謀あり廣常殊
て凶忠も城と焼らるる秀義はて奥河原
の城より依りて

十七日頼朝鎌倉より河内和田小寺帝を威とあり侍
別を補せし依り先年平家威は城とらるる

許容ありき依り

十二月十一日鎌倉大倉邸の別館に移せあり出仕の
侍之百十一人又平家人等みふそのめり再館とて
てうりしとて進りこれ東武乃軍との政を
たりし子孫依り推て鎌倉とす今日園城
寺平家のつめ焼らるる依り堂舎焼らるる
とる依

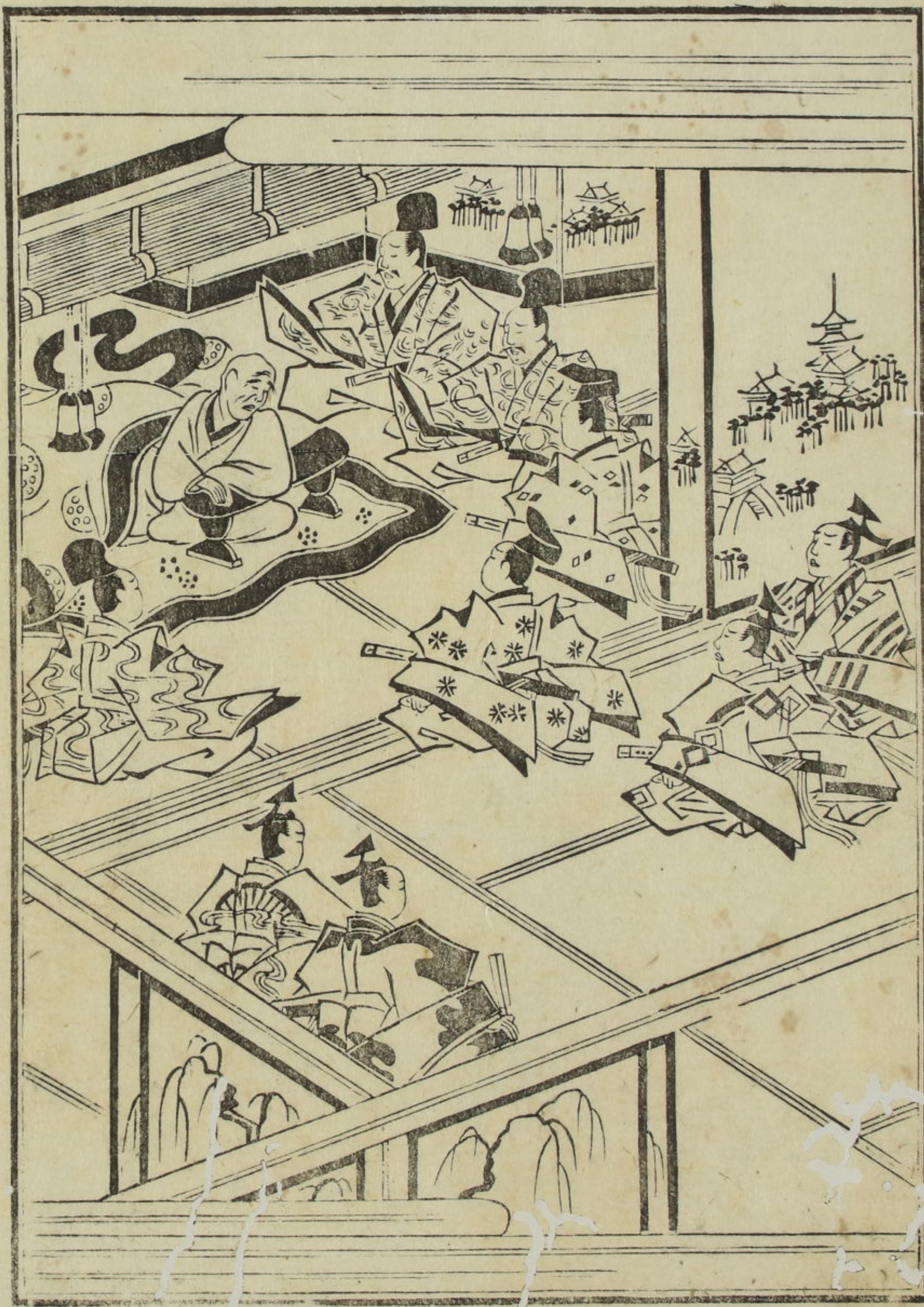
日廿八日平家室漸朝長東大具福安寺と焼らるる
堂舎佛像焼らるるを回祿す右先年平家念の
よくみきしとて平家のつめ焼らるる

治承五年正月十一日梶原平景時頼朝に作

よりてらるゝめくはるゝ年守去年乃冬より寒
かりし母ありたり文筆は推す只言語と巧し
士より勢勢意は相するなり

閏二月四日入道平相國慶元年兵衛佐和朝
兵とあまぎとて清威大よいといふは池の俾
及ゆらうら子歎かれ一友子頼朝幼少れい
乃まうあるまことかりい命とまうけて東國は海を
東必いなる源氏の清代おんれいあやね東玉
一海一き依頼朝と守護して浄海が二門と海を
いまづといふあ斗の結核なり入道が不覚一つ
まのうとをなすもいふと恥上くせしめしとる

入道相國去月廿五日より病はさして今日薨じ
それ遺言の中も高部よりして遺言はくは
あもして程程が首をとるてりか塚の墓のま
いとまはれしとるや



壽永二年四月五日朝江崎より行りしにさあふ糸
 足利と肥後と和国と浦島河洗ありこれ雄の
 文光上人頼朝河洗と祈があらは弁文と河洗
 は初清あり初めく供養ありまは成也その日各
 と立しきてゆりまふ金洗沢の多しよして牛
 物と見あふ下河名座月和国と小田高下
 きの前負よ志つがけて文華練淨等と賜
 八月十一日百冠河臺下男子河平産河洗者ハも光
 河審梨良遷吟強ハ師岳共束射重河河越言
 重頼ハ書河乳付よハハ河守刀ハ河津文白山去
 屋和田権原号なるハ英人等ハ河なるハ二百集

壽永二年平家朝をあらく西海にわらびて本曾を
冠者京に入て征夷大將軍と宣とらうり忽ち
平家此二の舞よりおれしき三年正月九日朝に
うさして本曾長仲討治のめ合才蒲冠を靴
源九郎義経の教り後此軍兵とさしてせり
らめゆ靴の概多うり義経の治より教り
へり本曾は并に取らして近江國より一系此
忠朝以下此軍兵粟津よりて致し相換回の人
石田次郎本曾義仲が首ととる

二月五日靴朝の軍兵大將軍軍勢ととらうりて
國一の言よおとじく日七日靴朝越後よりて一の言
をめ行しす越前之位通威薩守忠度敏中前月威
俊以下一子余勢と行しより中將重衡と生捕
て徳倉に送る

朝朝勢の事よとひておぬ軍兵ととらうりて
大抵の言階泰治とりのく泰治をゆへ一は
朝勢の事よ二は平家追討の事よ三は徳社
神武の事よ四は佛事齋解の事
二月一日頼朝沙下文と結西九國乃任人等中
よりつらうりてやくいあんとらうりて平領を安
一平家と追討とらうりて

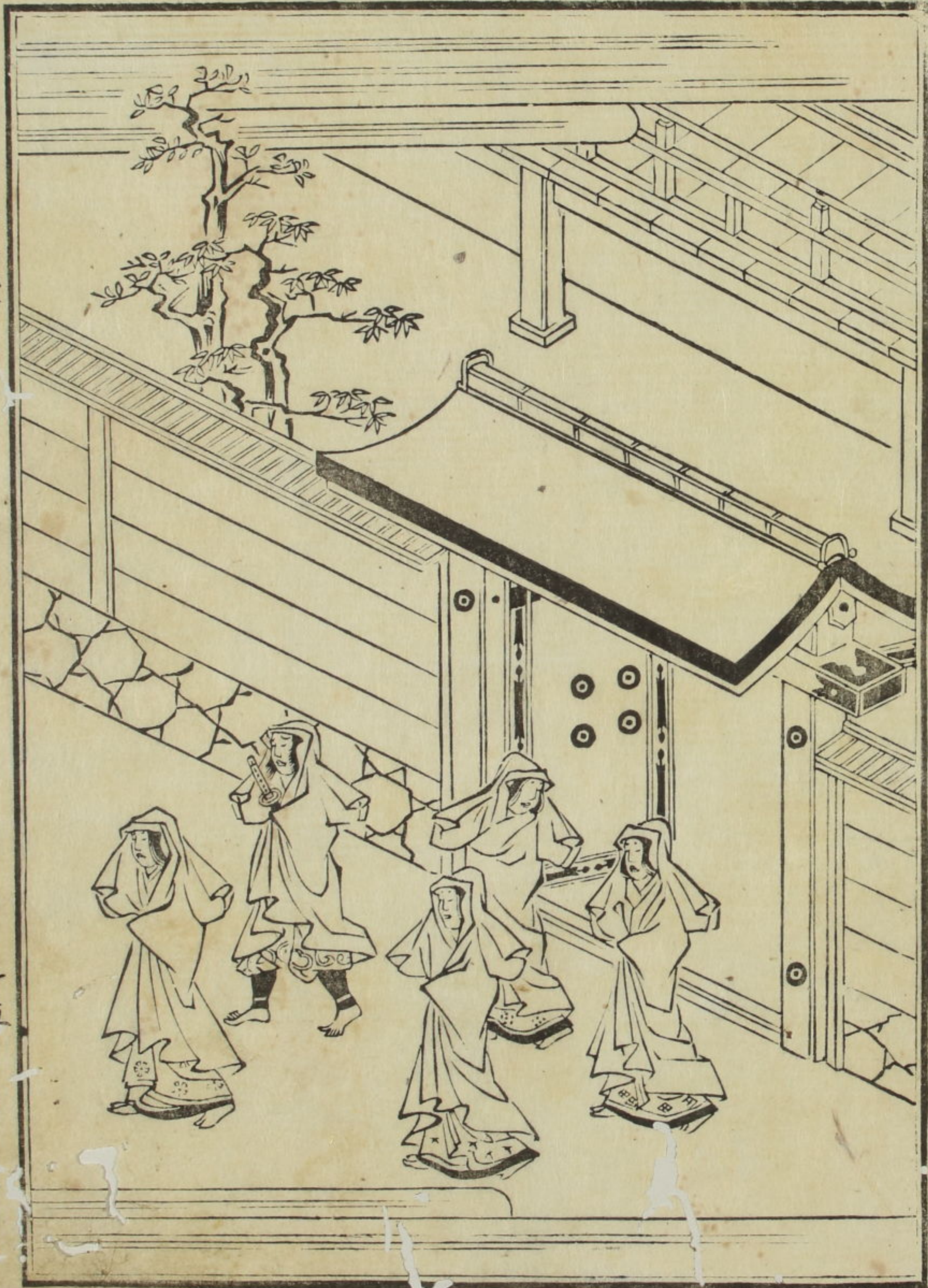
四月八日源九郎の使を京より下るるに去りて

七日陰自わり 頼朝正位下り 叙さる 依二 頼朝
進討の業也

池大細之頼威ハ元年平家朝房の討頼朝四日通
れ有ゆりて落とばりありあり 池禪尼を
忠と執どんごめ 頼威の執勤とす 頼朝
領之中 信光の領とす 依二 依二

十六日壽永二年と改めて元暦元年とす
四月廿三日志水冠者義高落さる 依二 依二 壽永元
年三月乃以甲斐源氏武田五郎信光がト 依二 依二
本曾義仲と頼朝と不睦して 頼朝十方軍務と率
して本曾とてんとて 軍立あり 義仲平家進討

乃其事とす 依二 依二 一門の武士軍ハ 依二 依二
あごりありとて 別心ありとす 依二 依二 子息
志の此冠とて 人望よあると 頼朝わが子とす 依二 依二
とてかぬとす 依二 依二 依二 依二 依二
世に依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二
して 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二
かひ 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二
う 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二
杉原せしめ 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二
依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二
よありて 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二 依二



十五

傳記

雙入りしころ一時は海野少太郎幸氏とて入る志水
 也同年一十一歳の時ありてしころ終一
 幸氏とていふ志水は志水とていふし
 りれは是れは朝あつたころなりし幸氏とてし
 一は軍さふかゝりしころなりしとてし
 一はの志水なり

同廿六日坂藤次親政が節恒春日光澄とらふ入
同河原よとひて志水冠者と講すけ事非君すひ
て愁歌のあまり敷水と新あひ母沛景あふあひ
れもわう一と序ふ六月廿七日非あひ歌ふゆ人病あひ
くつらうあふふふひゆき也と娘君のゆふふ細
とことりさずやと沛母の巻強沛横をきれ頼朝
ものほづさ理あひ坂藤次が節恒春日光澄首と別
らふ

八月廿四日新よ公文取と化る今日立程上標わり安
藝分中原廣元と別當とす

文治元年正月蒲冠者靴靴と長門必未同冥まつ

りそれより春清あふゆりて平家とせめふを
後園任人仰捧うる唯澄日中緒方うる唯繁
等靴靴の合下よりうりて八十二艘の舟船ととてし
けりやう同坊園任人守作部あふ七を陸とふ
ふと報来となふ

二月十六日源九郎義経淡路園八時よたもひく
十九日辰尅判官長伴親之松の在室と焼くふ
八時の城せあゆとされて先帝の裏とあらあふ
内府宗威以下一族等あふのりて海うらうかふ
後藤兵衛基佐うらふと先帝の裏と
焼くふ

二月廿二日長門赤間関壇浦の海よりして源平
二町余とるごとく一軍あり平朝むらり平家
おまけ二位禪尼清威のの寛知より按察局を先
帝安徳天皇とつとつよりして海をへり其所の
一族軍をあらうとて或る海よりつむ前門前
宗威子具清宗の捕ま神金門侍の帝都へ返
しをりなす

九帝判友義仲平家と打て大功ありといふもあ
れ宗はゆくと私乃思あつて梶原景時より討
つ頼朝の氣をわたり二月廿七日別人の私よりし
起清文とつとて急井を命と使とつて後念より

つり因幡前日廣元一怒といふも平家より

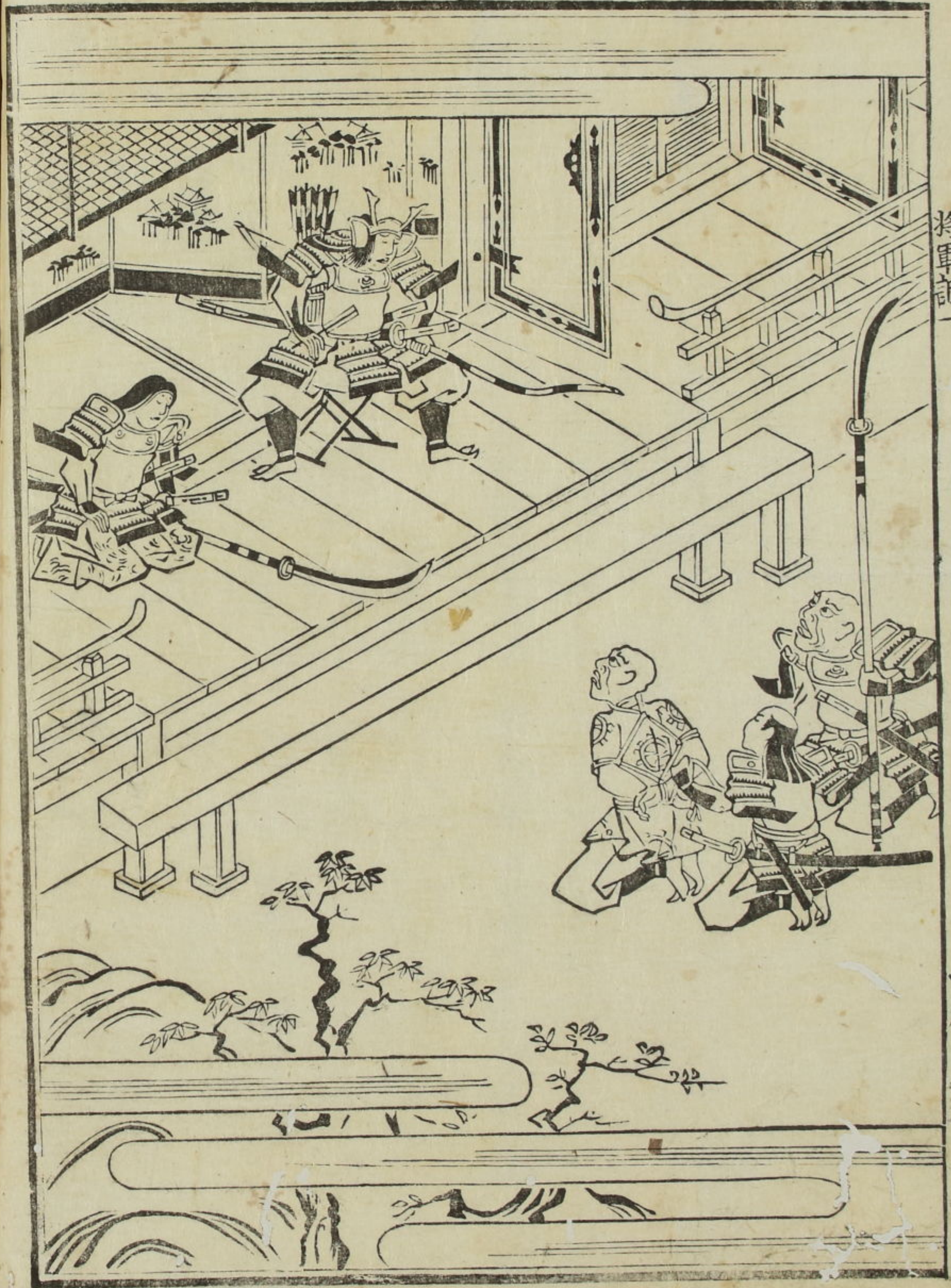
日十日平家追討の責よりして二月廿七日後二位
叙とつ除言今日到る

十五日義仲平家は日府宗威の息子と將て後念より
つとつ家系に帝討殺と酒匂の宿より一捕と
運とり小山七帝朝元使とつて後念より後念より
つとつとつとつとつ

義仲前日府と具して又瑞洛守藏を歎くが
武功よりつとつとつとつとつとつとつとつとつ
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ
日府宗威と瑞洛守野路の宿よりつとつとつとつとつ
景元

右東の清宗と殊す重衛ハ今日京へ入るふ次の日
 南朝よりつらふ津川のきくして殊を以
 頼朝又なる以義朝のりあ一乃他監と立名とよは
 養父ありは中と殿感のあもるを去めり十日請判友よ
 作とて東の獄門にきくしておたる以の首とあめと
 是徳田二清が首成相そく判友云朝と勅使と
 て徳念よりおの世日よと志と判朝頼朝川の
 きくしてそむい伴乃遺骨を文堂上人の弟子
 頼朝よけくくは頼朝を成代にけり
 あり
 六月二日子魁右なる以の遺骨并に清骨とて

南乃山堂の地よ幕所臨次ハ嶽と月ひくは日也日
 勅使判友保治判朝の競物大なり
 十月十七日頼朝の命りよつくと赤尾昌後水尾若
 十郎以下六十金務此軍士と率して実東より
 上洛し伴与守大判官義仲の赤尾守所の家
 にお討す昌後殿也と日廿六日昌後子の帝後二
 人と鞍馬山の奥よりあつめ集りて六條川原よりく
 瀬多



十月廿一日南の浦堂に奉りて居りては侍大に令色
此浦改築成朝臣仰がれ也

同女官南浦堂勝長壽院信春とよき侍導仰る
之井本元院信正公孫より侍奉り候式厳守也

頼朝の東常一と歩行あり候共十人千紫留
山之浦武田也小山五郎宗政侍叙とら候も

甲した遠守了徳侍鎧と表と布衣亦二人次徳兵
十去人次門和付候の徳兵卒人和田権原これと守

行す侍も本之徳山徳と云一服立と甲より表
と表と侍も日事あり候の時に是服立と云り候

いすくもてこれ勇士に成りたりと云り布施地
多く英とけくとりしき

廿九日刺朝上居乃首途あり

十一月三日彼前守り取守系使京都をかく

西國よりけりけりその勢二百余騎尼崎大物浦より

舟のしんと守る風浪をあらへ舟に海より

軍勢弱くはなりて是より舟に舟よりて電

すけり刺朝黃洲門よりてやまひと居とやめ

て徳念よりあり

同情前日廣元とていへ世とては徳念より

て人より梟懸より天下返還の事より後

と東國の事より所居住るれど聲ありあり西水

國のさめて新盤のくるととておらん歎く是れ

法らまんとおる毎軍勢よりいへるいへる

しめたり人のまづい國のつ弁えおらんけ次

は法を乃先置し守備地と居とて是よりその

おるもあつて守るやくしをまへしとて

刺朝上より可なりとてはこれよりして十一月廿五日

小糸守備時改しあり同廿八日妻やとて

く徳念の守備地取門勢家の庄とて福をす

後列事下つて兵糧米と宛保るその

れ次の日執事あり

十二月八日右方の狛川伊予守義隆の妾静女を
養王堂のきよようしてお茶屋よりひくす

十七日平家の子息糸杉よりねらるるゆゑて殺
と小松之位維威の息六代と遍昭寺の奥よりして
糸鷹と伝ふる雄の文元使僧と実安より一
てりあつた

文治二年一月は十六ヶ箇は物追補使并地以
補と伝ふるはよりしつと徳玉守養とをきして園司
に威とをきしてつと小使務乃名のよりありあり
左園村里に地以と補して居る伝はぬよをわいた
さうさうはりのまじり

静女今日一明鎌倉より来た同日六日義隆のゆ
とるゆゑは吉野山よりつて逐電せしゆらる
しつらびとすす日八日束朝つ日沙卷所務思
は社系あり静を廻廊よりあしてその藝をそん
のりよ和歌乃曲打羽のんようの子
あより 沙卷所務がんをあらはれし沙長とありて
るまをまよ

五月十二日和泉園小末郎乃在麻呂指守法実が
女の色民家の二階よりして伝前守の家を打らる
少末郎のくしとく京朝の侍
後使対定部内局昌明等并伝

七月廿九日静女男と聲られ伊予守義隆の妾

女子ありしむ母よ也とてなると男子ありしむは將軍の
如くあれありとて安達新三郎のむしり静が母
禪師歎きしつ井ふもひとり中宮の候
してしらす

八月十五日於朝つ病る累子氣病あり西には所を
あふる羽院の水面として依名依藤共求雲清と号せ
し保延三年八月に道世と秀師九代の後衛と
してしらす武勇の名ありしも今ハ花月風録に
更し他ありしもの取らざるの事ハ新談して次の日
物くゆれ朝つともあま下も苗も守頼朝能く
銀の猫と名りし西りつわりのあまふ子と

つてしらす奥列の秀衛ハありが一族也後家防重
源上人東大寺勅進のあ契約として奥列よくは
たの次よ西行の病を号し巡礼とて也
九月廿二日精屋藤を有季系部よりして和作の家
人堀藤を席景光といきと依又中山門東河内
して依藤忠法を号す

文治三年二月十日平作守義仲妻子と相具し
伊勢安濃守として奥列秀衛ありしむしり
之月十日去依國に任人夜須七郎新宗と梶原平三
景時と對交の事於朝あし批判しむしり新宗ハ
源平相浦合戦の時平氏の家人月宮の任人

若園二節兼秀日之節一氣来と生捕り〜と
 この貴おこらるる〜
提平平家進付の時
軍奉行とせ
 日此言上も依り〜
 して〜
 のり〜
 竹亭新〜
 春日部共衛尉〜
 して〜
 人〜
 ら依景時〜
 めめ〜



閑院の御居まき年七月の大地震は破崩仰作
理とてさゆきまうさゆはあり

七月十八日仁田守忠常が書付まき
と洪水の友あまなりて江尻乃海より海と
逆浪もさざりて舟を覆せり合れ男女も水
底へ入ると希有うしてさするあ忠常が書一
人後死にけ女海に信力ありと人あくいとま
ひしうらう今より海まで毎月額守云所の社
ままうでこりあふれふあまに月ままを
うまゆれらるるまよとてさゆはありと
けて云鶴の社ま仁田忠常が命に終りたとの

甲一が明神に御交りてまがやうらうま
らん貞女乃いざと時の人遊戯一きり
九月廿七日島山二部重忠因人とぬく千袋
新分瀬にまゆきふまあう六月廿九日新色
正元とゆ使してゆ書と作図よりさうこれ
惣列治田北所尉の島山が所領して地氏織
たりまふと市忠う代官列南美にさうまの
負部大領家徳う不長考があと返却一資
財とさうらうまゆり家徳するら神人との
て新まゆりも徳念まゆり市忠とあり
めくみ細とゆはゆり代官まゆりか為文ま

みぢ守とて... 島に...

十月日午... 頼朝... 切ら...

女五日... 幸あり...

女九日... 漸子遺言... 作ごとく...

十月十日... 威等...



ともじちろはよ近衛相交て平朝録乃刻
 松九渚の舟やうと起よち〜ど之浦仔の預平氏
 因人のうら武藤小次郎資頼といふもの
 平氏の家人
 頼のあしをさす事なまるとらせ〜ひひと
 三浦義澄すかつら海気文と〜ひいてい〜資
 頼とあ〜してはせ付〜ゆ〜う〜あ〜急〜事〜れ〜義
 るねむ因人〜してこれをは〜あ〜急〜あ〜記
 進わ〜う〜〜され〜う〜頼綱つ〜ゆ〜あ〜ゆりて
 ゆは〜し〜め〜資頼の眉と〜し〜〜と〜これと相
 進〜ま〜ゆ〜一〜藝〜と〜〜と〜キ〜子〜け〜〜事〜ま〜こ
 と〜〜の〜〜



貞列乃泰衛伊予守を討ぐ——と宣言をなす
 乃び於朝つとひくゆせつらとて——は民衆を歩
 りしうし海とらども日比宣言と用ひど志はく家
 まりの科のまき——泰衛とせむぐさう——
 され京都に奏す——とて人殺とのいふらるる月
 八日千宗が常陸子作とて新造のゆきとせむせ
 依吉めつ治業に年千宗が軍勢と率——と頼
 朝の陣まきせらり——とて結成とてまきとてひむら
 ちり割よりりて別してゆき乃事ゆせけりゆきを
 式は入道前將軍頼義との——安倍貞任の海軍
 任返治の討のゆきとて——寸は一丈二尺二幅なり

白糸とりのりてし、仔細を練え八幡大菩薩とて
申と海よりせしむる山崎三郎とてしむて海より
ふ今も奥州追伐の旗をたてしむるの徳川とて
つれづれなり

十九日羽朝の泰衡追討乃首速光陣ハ白鳥山重忠
をり八月七日奥州伊達郡の陣志山ハはさなす
泰衡要害とて人御戸去郡國衛とてなりしと
二万を誘ひてせむしめしむる打まひてしむるぞく
泰衡ハ高田長藤信長ハ日軍平賀とてしむる
石那坂の上陣より戦ひ死に御戸國衛ハ和留
英威がたよゆりて死に泰衡ハ若井郡平泉の

館ハ二の宮家とてせめしむるされ館ハ火とてしむる厨
河のまよひ居りしが九月十日徳代ノ郡本
河田治郎とてしむる年来れ思とてしむる泰衡が首
とりて斬断しよまるとれまはしむるハ鹿の科あり
後代乃んせしめしむる河田とてしむるせしむる
同九月十日羽朝の陣奥州郡の陣とてしむる下れを
とりしめしむる平泉の館上ノ陣焼とりびてこれ
なりしとてしむるこれとてしむる書ありやとてしむる
ハ奥州乃ん人とてしむる後々の事橋本ハ実高
二人ぬきしむるしむる別とてしむる同
ハは先手賜は習ててとてしむる國郡の

色の車よりの家前近去人 御衣 徳共八人ありて
院系わり日三日支織と輝返しされりる時所
車よりの一むらさき御守よとむらさきの鎌倉
りしむらさき右左将家軍東より向むらさきと九日
徳倉よりの入あり

古成所の率入る徳ともく守ししむらさき徳の
羽羽卿の務わりる言東徳徳保つる也

遠久二年一月日政所此言書初をたたらむら
前より徳のゆき人等勅責思顧りしむらさき
ゆきを沙判と載らしむらさきひの奉書と用ひらむら
と今右左将の官職はむらさきゆき前此ゆき

かきむらさきとゆき又ありむらさきとありてありける
しむらさきとあり定らむらさきの役人と定むらさき
い前因幡守平親長慶元四道平執事ハ中文房と吾
康信 は君を説 侍所別ありた御つみ射平親長と感所目
平景時京都の守護ハ右左将徳保つ徳保のむらさ
ゆき人藤原朝臣遠とあり とむらさき
日二月官位冠小町大政のむらさきあり矢央りえそ
大名屋敷跡無のむらさき右左将の侍館より言徳殿
廻席 徳保 徳保と同年の言遠とありむらさき
等これあり

日二年一月新御堂此地と平しとありた言遠

立りおろしとて其日はねむりての地はあつく見た
まゝに去らざる人あはれ申すたの目
育つる男ありねむりてをらんをたすひ握系
景時よゆせそゑのあはれよを明らむとて依其
まゝとつとて擲とせしはるまゝとてあはれとて
懐の日は氷れとてなると一尺わたりたす口とて
りらとつとて目れとて井とてゆとてあはれとて
日よつとてあはれとてあはれとてあはれとて
此侍大将上物とてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

新中次郎 彦威 丹波國ありとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
宣旨とてあはれとてあはれとてあはれとて
あはれとてあはれとてあはれとてあはれとて



同日年二月文字より人後家系二僧子情願あを
 知行せしめ東大寺大佛殿建立乃助成として
 一いつまひ

常陸必麻治の社に女年一をあ〜と造改子
 交わりし安元二年より女年よりより
 月一日將軍家なりとつりて七月十日
 等成功あり

五月十六日富士野乃所持あり五向の飯屋
 於朝つる君振敵として決まらるる
 連て飯屋とつりて將より〜の〜の日
 あり君始と射りし於朝つる〜の〜

けり。梶原平景とて、このころ、徳念はけり。
女沙卷へ、さういふ文は、清盛を、武將の
婿とて、世にの麻多と村とらうたうあぐ。
守楚忽の早徳とて、氣味なれとのまよ景
さる面白くして、さういふ七日、未明より、勢子を
り、り、ゆ、持わり、向、感、と、何、り、子。
大八日子、魁、伊東入道、祐親が、孫、曾我、祐成、才、時、宗、
東、う、ら、う、して、又、若、祐、成、と、い、う、と、祐、成、の、仁、田、忠、常、一、は、
これ、時、宗、の、五、弟、九、は、生、攝、次、の、白、首、と、創、六月、七日、
羽、羽、の、徳、念、よ、う、り、あ、ふ、
羽、羽、の、合、衆、三、川、守、範、頼、孫、及、の、合、あ、あ、う、

範頼起請文と書進どと、とて、將軍、政、許、官、は、
して、八月、十七、日、範、頼、伊、豆、下、向、あ、り、と、將、野、
女、宗、若、名、よ、ゆ、づ、ま、ら、ま、ひ、こ、す、う、海、人、の、と、
同、乙、年、二、月、官、將、軍、頼、朝、上、高、一、て、古、成、死、乃、
亭、よ、入、り、あ、る、矣、頼、家、沙、卷、中、政、子、同、上、高、あ、り、
二月、十日、將、軍、頼、朝、の、東、大、寺、乃、信、長、よ、あ、り、結、り、ん、と、
め、南、於、東、南、院、よ、無、所、あ、り、あ、り、あ、す、う、ら、び、く、
ま、上、ま、し、南、於、う、り、音、あ、り、頼、朝、の、れ、沙、布、施、と、て、
一、千、七、百、八、十、名、貫、金、子、あ、り、絹、一、千、疋、と、施、入、り、
義、盛、景、時、等、を、行、と、同、上、二、日、信、長、と、り、り、て、十、日、日、
あ、り、よ、う、り、あ、ふ、

同女七日將軍家系のわたりしりし女之と献す
 同六月之日將軍家系のわたりしりし女之と献す
 綱代の車 布衣 供奉りし所あり
 女五日朝朝の女子 沙巻 宮東下向
 七月日 福毛之席 守成が書 武成の書 して免去
 日一りつらるやうとゆふく 醫療すといふも
 ろつ井の率とていふに 守成の別の出しに 徳の
 事らる代子 出家とていふ事 小系遠は 守成の朝
 つの沙巻 臥しに 妹とていふ事
 建久九年 十二月 福毛之席 守成の書 武成の書 して免去
 相模川の松原養といふ事 將軍朝朝の松原の事



守成正一巻

小福^{まきで}より清海りのなみしてさうりちりて清やまひ
 つせもひ次の歳正徳元年一月廿三日薨去りし
 年五
 十一

